

社交不安における自伝的記憶バイアスの検討

泉水 紀彦¹ 望月 聡²

本研究は、社交不安における自伝的記憶想起時のバイアス（情報バイアス、視点バイアス）について、実験的に検討を行った。22名の参加者（男性12名、女性10名：平均年齢19.91歳）に、同じスピーチ課題を体験してもらい、数日後にそのときの出来事を思い出してもらった。実験の結果、社交不安傾向が高い参加者は、低い参加者よりもネガティブな自己関連記憶を多く想起する傾向が明らかになった。また出来事後の反すうが高い人ほど、自分の失敗したふるまいや身体症状を多く想起する傾向が明らかになった。しかしながら、視点バイアスについては、ほとんどの参加者は現場視点から記憶想起していた。身体感覚については、生理指標に有意差は見られなかったが、社交不安傾向の高い参加者は自己評価の側面で、不安症状を強く訴えており、2日後も維持されていた。本研究の結果をうけて、社交不安と自伝的記憶バイアスの関連について検討を行った。

キーワード：社交不安、自伝的記憶バイアス、視点、自己関連情報、post-event processing

問題と目的

社交不安とは、「現実あるいは想像上の社会的状況において、他者からの評価に直面したり、またそれを予測することから生じる不安状態」（Schlenker & Leary, 1982）と定義される。社会的状況とは、観衆や相手が存在する対人相互作用状況のことを示し、他者から観察される人前でのパフォーマンス状況と、他者と交流する相互作用状況に大別される（Mattick & Clarke, 1998）。

近年、社交不安の認知処理に着目した研究から、社交不安傾向が強い人が、過去の体験や出来事のどのような側面を思い出しやすいか（自伝的記憶想起バイアス）についての研究が行われている（Morgan, 2010）。自伝的記憶のバイアスは、主に2つの観点から検討されている。一つは、自伝的記憶想起の際にどのような情報が想起されやすいか（情報バイアス）である。もう一つは、自伝的記憶を想起する際に、どのような視点から出来事を想起する傾向（視点バイアス）があるかである。

まず、自伝的記憶想起における情報バイアスを扱った先行研究として、D' Argembeau, Van der Linden, d' Acremont & Mayers (2006) は、社交不安障害患者群と統制群を対象に、社会的出来事と非社会的出来事を想起してもらい、その出来事の現象学的な特徴を検討した。その結果、社交不安障害患者が、社会的出来事を想起した内容には、視覚や聴覚等の感覚的様相は少なく、詳細な自己関連情報が含まれていた。Anderson, Goldin, Kurita & Gross (2008) は、

社交不安障害患者群と統制群を対象に、不安を感じた社会的出来事の記憶想起を求め、報告内容を機械的に言語分析した。その結果、社交不安障害患者群は統制群と比較して、自己関連単語とネガティブ感情語を多く使っており、一方で他者に関連する単語は少なかった。Mellings & Alden (2000) は、社交不安傾向の高い人を対象に実際に社会的状況を体験し、その後その社会的状況を想起する実験を行った。実際に社会的相互作用（会話）に参加してもらい、その時の身体感覚や注意を測定して、そして2日後の相互作用場面の自伝的記憶想起内容の検討を行った。その結果、社交不安傾向の高い人は、社交不安傾向の低い人と比べて、ネガティブな自己関連情報を多く想起し、相手関連情報の報告が少なかった。

もう一つの観点としては、自伝的記憶想起における視点バイアスを扱った研究である。視点とは、記憶やイメージを思い浮かべるときの見方のことであり、観察者視点（observer perspective）と現場視点（field perspective）の2つの見方がある。観察者視点は、「あたかも外から自分をみるように」イメージする視点で、現場視点は、「あたかも自分の目でみるように」イメージする視点であると定義されている。この視点は、固定されたものではなく、一つのエピソード記憶を想起するときに、どちらの視点も含まれており、どちらの視点の割合が多かったか（偏っていたか）で、観察者視点であるか現場視点であるかが判断される（Nigro & Neisser, 1983）。

社交不安傾向の高い人は、エピソード記憶想起時に視点のバイアスがあることが指摘されている。Wells, Clark & Ahmad (1998) は、社交不安障害患者が過去の不安を感じた状況を観察者視点から想起する傾向を示した。対照的に、統制群は現場視点を使ってい

1 東京成徳大学

2 筑波大学人間系心理学域

た。社交不安障害患者が使用した観察者視点は、状況を広く客観的にみる視点ではなく、自己だけに注目し、自己の様子を詳細にモニターする視点であった。Sutin & Robins(2008) は、観察者視点の機能として、「距離をとったり、感情的関与を下げる機能(Dispassionate Observer)」と「記憶に関連した感情を誇張したり、現在の自己と過去の自己とのつながりを強める機能(Salient Self)」の2つの仮説を提唱している。社交不安については、観察者視点は、視覚的・情動的に自己注目を増幅させるため、Salient Selfとの関連を指摘している。

一方で、社交不安傾向の高い人は、必ずしも不安を感じた社会的出来事を想起するときに観察者視点を用いるわけではないという研究もみられる。不安を感じる社会的状況でも一概に観察者視点から想起されるわけではなく、不安の強度が関連することや(Coles, Turk, Heimberg & Fresco, 2001)、社交不安傾向の高い人と健常者はどちらも現場視点から出来事を想起した先行研究(Stopa & Bryant, 2004)も報告されている。

自伝的記憶バイアス研究の問題点として、第一に、自己関連情報が多く想起されているが、その内容は様々であることが考えられるため、より詳細に検討する必要がある。第二に、自己関連情報の多さは、社会的状況下での体験(身体症状の程度、不安の強度、自己注目の程度)によって変動すると考えられる。社会的状況の体験と記憶想起とを比較して検討する必要があるだろう。第三に、記憶の視点に先行研究の結果が研究ごとに異なる点である。観察者視点からの記憶想起について、条件を統制した検討が必要となるだろう。

そこで本研究では、低社交不安群・高社交不安群の参加者が自伝的記憶想起の際に、想起内容にバイアスが見られるかを検討することを目的とする。高社交不安群の参加者と低社交不安群の参加者に同じスピーチ課題を課し、2日後のスピーチ課題の記憶想起(自伝的記憶想起)を求めた。記憶想起内容の検討は、スピーチ課題の内容を自由再生してもらい、その自由記述内容を分類・比較した。同時に、スピーチ時の身体感覚(BSQ)と他者から見える自己の様子(行動の自己評価)を、スピーチ時(1回目)に加えて、2日後の記憶再生時(2回目)にも測定を行い、比較検討を行った。

また、想起感覚(記憶想起時に、参加者が感じる感覚)やPost-event processing(PEP)についても測定を行う。社交不安傾向の高い人は、不安を感じた社会的出来事の後に、その出来事を反すうするといわれる(Fehm, Schneider & Hoyer, 2007)。本研究の実験デザインは、一日目と二日目の間に二日間のスパンをあけたため、PEPを行う時間があると考えられる。自伝的記憶は、何度も思い返すことで再構成されうる記憶であるため、PEPによる記憶変容の可能性も考えられ

る。

方 法

実験計画

社交不安の程度(低社交不安群/高社交不安群)と、スピーチ予期の有無(2水準:2回目スピーチ予期あり/予期なし)との2要因参加者間計画。実験は2日間に渡って実施した。一日目はスピーチ課題、その2日後の二日目は記憶想起課題であった。

実験参加者

大学生22名(男性12名、女性10名:平均年齢は19.91歳)が実験に参加した。事後に、参加者はSPSの平均得点(20.55点)を基準として、低社交不安群と高社交不安群に分割された($t(19)=6.42, p<.001$)。BDI得点が高く(BDI=27)、抑うつ傾向が高い参加者1名を分析から除外した。

スピーチ課題

参加者は3分間スピーチを行った。スピーチ内容は事前に設定されており、参加者の名前、名前の漢字説明、長所・短所、大学に入学した理由、大学生生活で力を入れていることについて、評定者に向かってスピーチを行ってもらった。評定者が、スピーチの内容や様子を評価していると教示を行った。教示後に、白衣姿の異性の評定者が入室し、3分間スピーチを行った。

実験協力者(評定者)とスピーチ中の行動

スピーチ時の聞き手役として大学生3名(男性1名、女性2名)が実験に協力した。実験協力者は、スピーチ中にあいまいな行動(「脚をくむ」「首をかき上げる」「頭をかかす」「せきばらいをする」)を一定時間(40秒間)ごとに遂行した。あいまいな行動は、五十嵐・嶋田(2008)がスピーチ中に行う聞き手の行動として選定した行動である。

スピーチ予期の実験操作

二日目の質問紙に回答する前に、スピーチ予期を操作する教示を行った。教示は、参加者に2回目のスピーチ課題の存在を提示することであった。

測定変数

Social Phobia Scale日本語版(金井・笹川・陳・鈴木・嶋田・坂野, 2004) Mattick & Clarke(1998)が作成した「他者から観察される社会的状況、主として人前でのパフォーマンス状況に対する恐怖」を測定する尺度(Social Phobia Scale,以下SPS)で、20項目・5件法で構成されている。金井他(2004)によると、一因子構造で、「他者からみられることに対する不安」が因子としてあげられる。本研究では $\alpha = .90$ で十分な値であった。

ベック抑うつ尺度(林・瀧本, 1991)Beck Depression Inventory(BDI)は、抑うつ状態を測定するために、Beck, Rush, Shaw, & Emery(1979)によって作成された尺度で、21項目4件法からなる。本尺度はその日

本語版である。本実験では、高い抑うつを示す参加者をスクリーニングするために用いた。本研究では、 $\alpha = .79$ となり、十分な値であった。

Situational Self-Awareness Scale (SSAS) Govern & Marsh (2001) により作成された意識 (注意) の方向性を測定する状態尺度である。筆者が日本語訳をし、使用した (9項目・7件法)。下位尺度は、私的自己意識項目 (3項目)、公的自己意識項目 (3項目)、周囲への意識項目 (3項目) から構成されている。教示文は、「今この瞬間のあなたの気持ちに基づいて、各項目に回答してください。」であった。本研究では、実験開始時 (pre) とスピーチ課題時 (post) において測定を行った。

Body Sensations Questionnaire (BSQ; Chambless, Caputo, Bright, & Gallagher, 1984) 本尺度は、スピーチ中の不安に関連する身体症状を測定する尺度である。原版は17項目・5件法であった。本研究ではスピーチ場面に特化した身体症状を測定するために、筋肉の緊張、顔を熱く感じる、手の震えの3項目を追加した。本研究では、一日目のスピーチ課題後 (1回目) と、二日目の自由再生後 (2回目) に回答を求めた。

行動の自己評価 (Behavior Questionnaire, 以下 BQ) Stopa & Clark (1993) と Mansell & Clark (1999) が使用した Behavior Checklist からスピーチ場面に適した18項目を選定した。他者から見たスピーチ中の自分の振る舞いや様子を評価する尺度で、肯定的行動9項目、否定的行動9項目であった。否定的行動は、全体的な否定的行動を示す全体否定的行動3項目と、社交不安と関連した否定的行動である不安関連行動6項目から構成される。BSQと同様に、一日目のスピーチ課題後 (1回目) と、二日目の自由再生後 (2回目) に回答を求めた。

不安 (気分) Visual Analog Scale (VAS) を用いて、実験開始後 (pre)、スピーチ課題後 (post) に、気分の測定を繰り返し行った。気分尺度は、怒り、喜び、不安、落ち込みの4項目によって構成された。本研究では不安のみを分析対象とした。各項目は、0 (まったくくない状態) から100 (想像できる最も高い状態) までの100mmの直線上に、今の気分に当てはまる場所 (スピーチ課題後は“スピーチ中の気分に当てはまる場所”) に縦線を引くことにより測定した。0からの距離 (mm) を得点化した。

スピーチの出来 参加者はスピーチ課題後に、スピーチの出来について自己評価を行った (1項目・6件法)。

スピーチ体験の自由再生 スピーチ時の記憶の想起様式を検討するために、スピーチ課題の2日後にスピーチ時の記憶を自由再生してもらった。3分間の閉眼想起してもらったあと、スピーチ場面について最低5個以上記述を求めた。

記憶想起の鮮明度 自由再生を記入してもらった後に、記憶の鮮明さを回答してもらった (1項目・6件法)。

想起時の視点 鮮明度と同様に、自由再生後に想起時の視点の回答を求めた。「どのような見方から実験でのスピーチを思い浮かべましたか」に対して、-3 (自分の目でみるように) から+3 (自分の外側から観察しているように) までの7件法で回答を求めた。

記憶問題 スピーチ場面での記憶力の程度を測定するために、独自に質問項目を作成した。質問項目は、3種類から構成されており、①参加者の行為、②評定者の服装や振る舞い、③部屋の物品や配置であった。18項目・2件法 (はい・いいえ) であった。

Autobiographical Memory Questionnaire (AMQ; Rubin, Schrauf & Greenberg, 2003) Rubin et al. (2003) が作成した自伝的記憶想起時の想起感覚を測定する尺度である (12項目・7件法)。本研究では、社交不安の程度によって同じ出来事の想起感覚に差異があるかを検討するために使用した。視覚イメージや聴覚イメージといった記憶想起の感覚要素、再体験やタイムスリップした感覚といった想起感覚から構成されている。

Post-Event Processing Questionnaire (PEPQ; Rachman, Grüter-Andrew & Shafran, 2000) Rachman et al. (2000) が作成したスピーチ後の反すうを測定する尺度である。12項目から構成され、0 (まったくくない) から100 (想像できるもっとも高い) のVASで回答を求めた。

State-Trait Anxiety Inventory (日本版STAI; 清水・今栄, 1981) STAIは、状態不安と特性不安を測定するために Spielber, Gorsuch & Lushene (1970) によって作成された尺度で、40項目4件法からなる。本研究では、予期不安操作の確認のために、状態不安20項目を使用した。

生理指標測定

生理指標を測定するために、皮膚コンダクタンス水準と、指尖脈波を測定するセンサーを右手に着用してもらった。右手の人差し指と中指に皮膚コンダクタンス水準用センサー、右手薬指に指尖容積脈波用センサーを装着した。①ベースライン期 (3分間)、②スピーチ準備期 (3分間)、③スピーチ課題期 (3分間)、④スピーチ後 (1分間) の4つの時期に分け、集計を行った。各時期における皮膚コンダクタンス水準 (SCL) の平均値、最大値-最小値を算出した。指尖容積脈波は本研究では分析に用いなかった。

実験手続き

実験の参加者募集用紙を配布して、応募を募った。募集用紙には、実験目的、実験の内容、2日間 (各40分) に渡る実験であることを告知した。参加者入室後、実験者から実験の説明、倫理面への配慮、個人情報保護、同意取得についての説明を行い、参加する場合は同意

書に記入してもらった。

1日目 気分 (pre), SPS, SSAS(pre), BDIへの回答を求めた。回答後に別室へ移動し、生理指標を測定するセンサーを着用した。装着後、閉眼・深呼吸を行い、気持ちを落ち着かせるよう促し、3分間のベースラインを測定した。スピーチ教示をし、準備時間を与えた後、評価者に向かってスピーチを行ってもらった。スピーチ終了から1分間測定を続け、センサーを取り外した。元の部屋で気分, SSAS(post), スピーチの出来, 行動評価 (1回目), BSQ (1回目) への回答を求めた。

2日目 二日目の実験は2日後に行われた。参加者の半数にスピーチ予期の教示を行った。STAI-stateへの回答後、1日目のスピーチを想起・記述してもらい、続けて想起したイメージの視点と鮮明度、スピーチ時の行動評価 (2回目) とBSQ (2回目)、記憶問題, PEPQ, AMQへの回答を求めた。最後にディブリーフィングを行い、謝礼を渡し、実験を終了した。

実験時期

2010年2月から5月にかけて実施した。

結 果

基礎変数

社交不安群の特徴を検討するために、年齢, SPS, BDIの平均値を比較したところ、SPSにおいてのみ有意な差が見られ、高群 ($M=26.78$) が低群 ($M=14.17$) よりも得点が高かった ($t(21)=6.42, p<.001$)。

スピーチ場面における状態自己意識 (SSAS) と不安 スピーチ場面での自己意識の変化を検討するために、公的自己意識, 私的自己意識, 周囲への意識を、スピーチ前 (pre) とスピーチ後 (post) に測定を行った。各変数について、社交不安群と測定期 (pre-post) を要因とした2要因分散分析を行った。公的自己意識においては、社交不安群の主効果, 測定期の主効果が有意であった (社交不安群: $F(1,19)=8.74, p<.01$; 測定期 $F(1,19)=41.79, p<.001$)。高社交不安群は、低社交不安群よりも公的自己意識得点が高く、両群の参加者ともスピーチ前 (pre) よりもスピーチ後 (post) の得点が高かった。交互作用はみられなかった。周囲への意識については、社交不安群の主効果が有意傾向であった ($F(1,19)=3.26, p<.10$)。高社交不安群は、低社交不安群と比較して、全体的に周囲への意識が高い傾向であった。不安得点について、社交不安群と測定期を要因とした2要因分散分析を行った。その結果、社交不安群の主効果が有意傾向であった ($F(1,19)=3.95, p<.10$)。高社交不安群は、低社交不安群と比較して、全体的に不安を強く感じる傾向にあった。

状態不安の程度 (予期操作チェック) 二日目のスピーチ教示により実験参加者が予期不安を感じていたかどうかを検討するために、スピーチ教示後に測定した状態不安得点を従属変数とした社交不安群×予期条

件の分散分析を行った。その結果、社交不安群, 予期条件の主効果, そして交互作用はいずれも有意ではなかった。低社交不安群の状態不安得点 ($M=43.25$) と、高社交不安群の状態不安得点 ($M=48.22$) には、有意な得点差はみられなかった。このことから予期条件は効果がみられなかったことが考えられるので、予期不安条件ごとの分析は行わずに、社交不安群ごとの分析を実施した。

自伝的記憶想起に関する変数

自由再生カテゴリ分け (Table1) 二日目の実験時に、スピーチ場面の体験を自由に想起してもらい、記述してもらった。Mellings & Alden (2000) にならい、①自己感情関連記述, ②自己行動関連記述, ③他者観察記述, ④周囲観察記述の4つのカテゴリを設定した。自己感情関連カテゴリは、参加者自身の感情や思考についての記述, 自己行動関連カテゴリは、参加者自身の振る舞いや発言の記述, 他者観察カテゴリは、評定者 (実験協力者) についての記述, 周囲観察カテゴリは、実験状況や設定, 周囲について記述であった。内容のカテゴリ分けに加え、各項目の情動価 (ネガティブ, ポジティブ, ニュートラル) もコーディングした。心理学系大学生3名で分類し、回答者の属性 (SPS得点, 参加者番号, その他の回答) を隠した状態で記述の文章のみで分類した。分類内容は、臨床心理学を専門とする大学院生1名がチェックを行い、分類の妥当性を確認した。

自由再生記述項目数 (Table2) 全参加者の平均記述項目数は、6.50 ($SD=1.44$) であった。記述項目数の最小値は5, 最大値11であり、5項目以上の回答が得られたことが確認された。社交不安群によって記述項目数に差異はみられなかった ($t(19)=1.31, ns$)。

また、全体および各群における各カテゴリに当てはまる記述項目数を集計した。社交不安群によって、カテゴリの項目数が異なるかを検討したところ、ネガティブな自己関連項目数において、 t 値が有意であった ($t(19)=2.15, p<.05$)。高社交不安群の参加者は、低社交不安群の参加者と比較して、不快な感情を伴う自己関連記憶を多く想起しやすかった。以上の結果から、全体想起項目数には社交不安の程度による偏りはみられなかったが、高社交不安群の参加者は、不快な感情を伴う自己関連情報を比較的多く想起しやすいことが示された。

記憶想起感覚の特徴 (鮮明度, 視点, AMQ)

鮮明度 自伝的記憶想起時における鮮明度の差異を検討した結果、社交不安の程度によって、想起した記憶の鮮明度に差異はみられなかった。

想起時の視点 想起時の視点を-3 (現場視点) から+3 (観察者視点) で測定を行った。 t 検定では群間に差異はみられず、視点は、全体的に負の数値をとっ

ており、現場視点から記憶を想起する傾向がみられた。

AMQ 想起時の感覚の特徴を検討するために、各項目について、*t*検定を実施したところ、言語化項目（“実験でのスピーチを思い出すにつれて、その出来事を言葉にして説明できる”）で、有意な差がみられた ($t(19)=2.45, p<.05$)。高社交不安群は、低社交不安群よりも言語化得点が有意で高値であり、出来事を言葉にして説明できる割合が高かった。

社会的状況後の反すう (Post-event processing) (Table3)

社交不安の程度とPEPの得点に差異がみられるかを検討したところ、両群に有意な差がみられた ($t(19)=3.72, p<.01$)。高社交不安群 ($M=315.56$) は、低社交不安群 ($M=141.33$) よりもPEP得点が高かった。このことから、高社交不安群の参加者は社会的場面後に出来事を頻繁に反すうしやすい傾向が明らかになった。PEPと自伝的記憶想起変数との関連をみるために、相関分析を行った。その結果、PEP得点とネガティブな自己関連項目数（自由再生）との間に、中程度の正の相関がみられた ($r=.52, p<.05$)。より詳細な検討を行うために、ネガティブな自己関連記憶項目数を、

ネガティブな自己感情関連項目数とネガティブな自己行動関連項目数に分けて、PEPとの相関を検討した。その結果、PEP得点と、ネガティブな自己行動関連項目数との間に有意な中程度の相関がみられた ($r=.45, p<.05$)。ネガティブな自己感情関連項目数との間には、有意な相関はみられなかった ($r=.002, ns$)。このことから、反すうが多い人ほど、記憶想起の際に、自分の失敗したふるまいや身体症状を多く想起する傾向が明らかになった。

スピーチ時（1回目）と記憶想起時（2回目）における行動と身体感覚の自己評価の検討

行動の自己評価 (BQ) 行動の自己評価（肯定的行動、全体否定的行動、不安関連行動、BQ全体）について、社交不安群と測定期を要因とした2要因分散分析を行ったところ、BQ全体において、交互作用が有意であった ($F(1,19)=4.61, p<.05$)。高社交不安群の参加者は、1回目よりも2回目でBQ全体得点が低く、他者からみた自分の様子を否定的に評価する傾向が低減していた。肯定的行動、全体否定的行動、不安関連行動においては主効果および交互作用はみられなかった。

Table1 自由再生における記述項目のカテゴリ分けと具体例

カテゴリ	ネガティブ	ポジティブ	ニュートラル
自己感情	最後の方で話すことができなくなり、焦った	相手の人と目があったとき少し安心した	指につけた機械が気になっていた A大学に入った理由・・・何となく。
	つまらない話だったかなと心配した 手の汗がすぐく気になった	さわやかな気分で話し始めた そこまで緊張はしなかった	
自己行動	緊張すると声が小さくなった 自分の視線をどこにやってよいのか迷った口の中が若干乾燥していた	笑顔を心がけていた 少しにやついた わりとおちついて話せた	いくつかの身振りを加えてスピーチした 自分は左手を動かす部分が多々あった
	他者観察 観察する人は無表情だった 相手の表情はずっと無表情で、何を考えているのかほとんど分からなかった	なし	白衣に茶色のブーツの女性 相手は何度か脚を組み替えていた
他者周囲	周囲観察 妙な圧力を感じた 時間が長く感じた	この状況面白いなーと、一瞬思った	自分の対面に人形があった PCのキーボードを叩く音が3回ほど聞こえた

Table2 自伝的記憶想起内容の項目数

		全 体 (N=22)		低社交不安群 (n=12)		高社交不安群 (n=9)		t 値
		M	SD	M	SD	M	SD	
全記述項目数		6.50	1.44	6.17	1.03	7.00	1.87	1.31
ネガティブ	自己関連	3.14	1.25	2.67	1.07	3.78	1.30	2.15*
	他者周囲関連	0.73	0.77	1.00	0.85	0.44	0.53	1.72
ポジティブ	自己関連	0.41	0.80	0.25	0.62	0.67	1.00	1.18
	他者周囲関連	0.05	0.21	0.00	0.00	0.11	0.33	1.17
ニュートラル	自己関連	0.50	0.74	0.58	0.67	0.22	0.67	1.23
	他者周囲関連	1.68	2.10	1.67	1.61	1.78	2.82	0.11

* $p<.05$

Table3 PEP得点と各変数との相関係数

自由再生項目数						
	ネガティブな自己 関連	ネガティブな他者 周囲関連	ポジティブな自己 関連	ポジティブな他者 周囲関連	ニュートラルな自己 関連	ニュートラルな他者 周囲関連
PEP	.52*	-.26	-.16	-.32	-.10	-.09

	BSQ2回 目	肯定的行 動 (2回目)	全体否定 的行動 (2回目)	不安関連 行動 (2回目)	BQ全体 (2回目)	視点	鮮明度
PEP	.64**	.10	.42	.44*	.31	.03	.12*

p<.05; ** p<.01

身体感覚 (BSQ) スピーチ時 (1回目) に報告された身体感覚の程度と、2日後想起時 (2回目) に再評価したスピーチ時の身体感覚の程度に関連がみられるかを検討するために、社交不安群と測定期を要因とした2要因分散分析を行った。その結果、社交不安群の主効果が有意傾向であった ($F(1,19)=4.06, p<.10$)。高社交不安群の参加者は、低社交不安群の参加者と比較して、自分の不安症状を全体的に高く評価する傾向 ($p=.058$) がみられた。その他、有意な主効果、交互作用はみられなかった。

皮膚コンダクタンス水準の変化

スピーチ課題での皮膚電位反応を検討するために、皮膚コンダクタンス水準 (SCL) を測定した。4つの時期ごとのの平均値、最大値-最小値を算出した。

測定時期の変化 各群と測定期によって皮膚コンダクタンス水準に差がみられるかを検討するために、各変数について2要因分散分析を行った。その結果、すべてのSCL変数において社交不安群による差異はみとめられなかった。SCL平均値においては、測定期の主効果がみられた ($F(1,19)=42.26, p<.001$)。その他、主効果・交互作用はみられなかった。SCL最大-最小値においては、各要因の主効果・交互作用はみられなかった。

生理指標と身体感覚・行動の自己評価との関連 スピーチ中に測定した生理指標と、身体感覚・行動の自己評価との関連を検討するために、相関係数を算出した。スピーチ直後の自己評価 (1回目) と、2日後の記憶想起時の評価 (2回目) の二つの変数と、皮膚コンダクタンス水準各変数との相関係数を検討した結果、精神的負荷がかかり、緊張が表れやすい②スピーチ準備期と、③スピーチ課題期のSCL平均値をみみると、BSQ1回目では $r=.15 \sim .18$ の幅の低い相関であったが、BSQ2回目とは $r=.47 \sim .57$ までの中程度の相関を示していた。SCL最大-最小については、BSQ2回目とスピーチの準備期の中に中程度の有意な相関がみられた ($r=.63, p<.01$)。SCL準備期においてSCLの変動幅が大きいほど、BSQ2回目の得点が高かった。

また行動の自己評価とSCL各変数との相関を検討した。全体否定的行動については、スピーチ時のSCL最

大-最小と1回目の全体否定的行動得点の間に有意な正の中程度の相関がみられた ($r=.44, p<.05$)。スピーチ時のSCLの変動幅が大きいほど、その時の他者から見た不安な様子を高く評価していた。不安関連行動については、BSQ同様に、記憶想起時 (2回目) の評価と、スピーチ時のSCL平均値との相関が中程度であった ($r=.43 \sim .49$)。

考 察

本研究の目的は、社交不安と自伝的記憶の内容の関連を検討することであった。

本研究で得られた結果をまとめると、高社交不安群は低社交不安群よりもネガティブな自己関連記憶項目を有意に多く想起する傾向がみられた。相手や周囲に関する記憶の想起には、群間で差異はみられなかった。身体感覚の自己評価は、高社交不安群の参加者は低社交不安群の参加者に比べ、身体感覚 (不安症状) の報告は多かった。

高社交不安群の参加者と低社交不安群の参加者との間で記憶想起の記述項目数に、有意差はみられなかった。その一方で、高社交不安群の参加者は、低社交不安群の参加者よりもネガティブな自己関連情報を選択的に多く想起していた。ネガティブな他者観察項目数と、周囲観察項目数には群間差がみられなかった。このことから、他者や周囲の情報の想起には社交不安の程度によって差が生じることはなく、ネガティブな自己関連情報の想起に偏り (バイアス) が生じていることが示された。また、PEPとの相関分析の結果から、ネガティブな自己関連情報を多く想起するバイアスは、出来事の後に反すうするほどに強まる傾向がみられた。以上の結果は、先行研究と一致する結果である。Mellings & Alden (2000) では、ネガティブな自己関連情報を社交不安傾向が高い人が多く報告しており、本研究と同様の結果であった。ただ先行研究においては、相手関連記憶に群間差がみられ、高社交不安群の参加者は低社交不安群の参加者と比べて、相手関連情報の報告が少なかった。この差異は、実験課題によるものが大きいだろう。本実験では、社会的場面としてスピーチを用いた。そしてMellings & Alden (2000) は、会話場面であったので、相手といっても評定者 (本研究) と会話の相手 (先行研究) とでは大きく異なる。スピーチ場面で相手を見ながら話すことを求められるため、社交不安の程度で相手情報に差異がみられなかったのだろう。

身体感覚について、高社交不安群の参加者の評価と低社交不安群の参加者の評価に有意な差がみられた。全体的に社交不安傾向が高い人は社交不安傾向が低い人に比べて、身体感覚の自己評価得点が高く、不安を多く報告していた。第3章では、社交不安が高い人のほうが、低い人よりも自分の身体感覚を多く想起して

報告する傾向があった。本研究では、スピーチ直後の身体症状の自己評価と、2日後の身体感覚の自己評価の間には、有意な得点変動がみられなかった。このことから、スピーチ時に体験した身体感覚を、そのまま記憶想起時にも思い出していた可能性が考えられる。一方、他者からみた行動の自己評価については、高社交不安群の参加者は、スピーチ時（1回目）よりも、記憶想起時（2回目）のBQ全体得点が有意に低かった。この傾向は、低社交不安群においてはみられなかった。高社交不安群の参加者は、スピーチ課題時には、不安感情が高まったことで、スピーチ直後にスピーチ時の自分の様子を否定的に評価した可能性が考えられる。この可能性を検討するために、予備的に分析を行ったところ、BQ全体得点（1回目）と不安（スピーチ時）の相関係数 ($r=.44, p<.05$)、BQ全体得点（1回目）とスピーチの出来の相関係数 ($r=.43, p<.05$) はともに有意であった。BQ全体得点（2回目）との間には、有意な相関はみられなかった。不安の高まりや、スピーチ課題の出来があまりよくなったと感じたほど、自分の様子を否定的に感じていた。

想起時の特徴に関しては、高社交不安群の参加者と低社交不安群の参加者との間で視点の差はなく、どちらも現場視点から場面を想起していた。自伝的記憶想起感覚各変数においては、高社交不安群の参加者は低社交不安群の参加者と比較して、記憶想起時に出来事を再体験している感覚や出来事を言語化して説明できる感覚が強まっていた。本研究では、スピーチ課題時のエピソードに関する記憶を可能な限り多く想起してもらうことを求めた。そのため、参加者はスピーチ課題でどんなことをしたか、どんな気持ちになったか、相手や周囲にはどのようなものが見えたかを想起し、言語化して記述することとなり、その結果として、参加者自身の目から見たような視点の記憶想起が促進されたと推測される。社交不安傾向の高い人は、エピソードの想起を求められると、ネガティブな自己関連情報を多く想起し、現場視点からそのエピソードを再体験しているように感じたと考えられる。

観察者視点からの記憶想起が起こらなかった要因として、次の2点が考えられる。一つ目として、スピーチ経験と想起までの期間が挙げられる。今回はスピーチ経験と想起までの期間が約2日と短かった。現場視点だけが優勢ではなく、両視点とも同程度の人数分布であった。本研究においては、ほとんどの参加者が現場視点から想起を行っていた。より長い期間を置くことで、出来事の記憶の再構成が促され、現場視点の記憶から観察者視点の記憶への変化をする可能性が考えられる。二つ目として、本研究の実験は強い情動価と過度の自己注目を感じる課題ではなかった可能性も考えられる。評価的なスピーチ場面を設定し、異性の評定者を配置することで、強い情動価と自己注目を引き

起こすように設定した。しかしながら、本研究では強い情動価を生じるような実験操作を行えなかった可能性が考えられる。スピーチ前後の不安気分を測定したところ、スピーチ課題を行っていたのにもかかわらず、不安は増加していなかった。

引用文献

- Anderson, B., Goldin, P. R., Kurita, K., & Gross, J. J. (2008). Self-representation in social anxiety disorder: linguistic analysis of autobiographical narratives. *Behaviour Research and Therapy*, 46, 1119-1125.
- Beck, A.T., Rush, A.J., Shaw, B.F., & Emery, G. (1979). *Cognitive Therapy of Depression*. New York: The Guilford Press
- Chambless, D. L., Caputo, G. C., Bright, P., & Gallagher, R. (1984). Assessment of fear in agoraphobics: the body sensations questionnaire and the agoraphobic cognitions questionnaire. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 52, 1090-1097.
- Coles, M. E., Turk, C. L., Heimberg, R. G., & Fresco, D. M. (2001). Effects of varying levels of anxiety within social situations: relationship to memory perspective and attributions in social phobia. *Behaviour Research and Therapy*, 39, 651-665.
- D' Argembeau, A., Van der Linden, M., d' Acremont, M., & Mayers, I. (2006). Phenomenal characteristics of autobiographical memories for social and non-social events in social phobia. *Memory*, 14, 637-647.
- Fehm, L., Schneider, G., & Hoyer, J. (2007). Is post-event processing specific for social anxiety? *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, 38, 11-22.
- Govern, J. M., & Marsch, L. A. (2001). Development and Validation of the Situational Self-Awareness Scale. *Consciousness and Cognition*, 378, 366-378.
- 五十嵐友里・嶋田洋徳 (2008). post-event processing が社会的場面における解釈に与える影響 行動療法研究, 34, 149-161.
- 林 潔・瀧本孝雄 (1991). Beck Depression Inventory (1978年版) の検討とDepressionとSelf-efficacy との関連についての一考察 白梅学園短期大学紀要, 27, 43-52.
- 金井嘉宏・笹川智子・陳峻雯・嶋田洋徳・坂野雄 二 (2004). Social Phobia ScaleとSocial Interaction Anxiety Scale日本語版の開発 心身医学, 44, 841-850.

- Rachman, S., Grüter-Andrew, J., & Shafran, R. (2000). Post-event processing in social anxiety. *Behaviour Research and Therapy*, 38, 611-617.
- Rubin, D. C., Schrauf, R. W., & Greenberg, D. L. (2003). Belief and recollection of autobiographical memories. *Memory & Cognition*, 31, 887-901.
- Mansell, W., & Clark, D. M. (1999). How do I appear to other? Social anxiety and processing of the observable self. *Behaviour Research and Therapy*, 37, 419-434.
- Mattick, R.P., & Clarke, J.C. (1998). Development and validation of measures of social phobia scrutiny fear and social interaction anxiety. *Behaviour Research and Therapy*, 36, 455-470.
- Mellings, T. M. B., & Alden, L. E. (2000). Cognitive processes in social anxiety : the effects of self-focus , rumination and anticipatory processing. *Behaviour Research and Therapy*, 38, 243-257
- Morgan, J. (2010). Autobiographical memory biases in social anxiety. *Clinical Psychology Review*, 30, 288-297.
- Nigro, G.N., & Neisser, U. (1983). Point of view in personal memories. *Cognitive Psychology*, 15, 467-482.
- Schlenker, B. R., & Leary, M. R. (1982). Social anxiety and self-presentation: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, 92, 641-669.
- 清水 秀美・今栄 国晴 (1981). STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORYの日本語版 (大学生用)の作成. *教育心理学研究*, 25, 62-67.
- Spielberger, C. D., Gorsuch, R. L. & Lushene, R. E. (1970). *Manual for the State-Trait Anxiety Inventory*. Palo Alto, CA : Consulting Psychologists Press
- Stopa, L., & Bryant, T. (2004). Memory perspective and self-concept in social anxiety: A exploratory study. *Memory*, 12, 489-495.
- Stopa, L., & Clark, D. M. (2001). Social phobia: Comments on the viability and validity of an analogueresearch strategy and British norms for the Fear of Negative Evaluation Questionnaire. *Behavioural and Cognitive Psychotherapy*, 29, 423-430.
- Sutin, A. R., & Robins, R. W. (2008). When the “I” looks at the “Me” : Autobiographical memory, visual perspective, and the self. *Consciousness and Cognition*, 17, 1386-1397.
- Wells, A., Clark, D.M., & Ahmad, S. (1998). How do I look with my minds eyes: perspective taking in social phobic imagery. *Behaviour Research and Therapy*, 36, 631-634.
- 本研究の実施にあたり，心理学類3年（2010年当時）の井上雄貴氏，屋代鮎子氏，山本愛美氏にご協力いただきました。深く感謝申し上げます。

—2016.1.31受稿，2016.3.12受理—

Social anxiety and autobiographical memory

Toshihiko SENSUI (*Tokyo Seitoku University*)

Satoshi MOCHIZUKI (*University of Tsukuba*)

The present study investigates autobiographical memory bias (information bias, perspective bias) in social anxiety. High and low socially anxious volunteers participated a single speech task in same situation. Two days later, they asked to recall the event. The results showed high socially anxious participants tend to recall more negative self-related memories than low socially anxious participant. Also, the more participant engaged post-event processing after the event, the more tendency to recall negative self-related memories. For the perspective bias, most of the participants recalled the event from the field perspective. For body sensation, there was not a significant difference in skin conductance level, but was a significant difference in self-reported measure. Following the findings, we discussed the relationship of social anxiety and autobiographical memory bias.

Key words: Social anxiety, Autobiographical memory, Memory perspective, Self-related information, post-event processing

Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo Seitoku University
2016, Vol. 16, pp. 77-85